

今江祥智 の本

第24卷

明るい表通りで

理論社

今江祥智 の本

第24卷

明るい表通りで

理論社

今江祥智の本 第24巻

一九九〇年二月初版

一九九〇年二月第一刷

著者 今江祥智©

発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話〇三(二〇三)五七九一〈代表〉

振替東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。



明るい表通りで

第一章	やろ、がえ	7
第二章	ピヤノ	21
第三章	おジャズ	36
第四章	ぼうたん	48
第五章	ウオー	60
第六章	デモる、	73
第七章	うらぎりもん、	86
第八章	クチナシにくちあり、	99
第九章	むかし話	112
第十章	おめでとうはん	125
第十一章	ヒョータンゴマ	138
第十二章	バッチ	151
第十三章	海ゆかバ	164

第十四章 調子^{チューンド・アップ}つばずれ^イ 178

第十五章 おち^い、やけ^いについて 191

第十六章 スウィングし^いすぎ^い 204

第十七章 おかしなフ^い、フ^い 216

第十八章 新しい家族のひ^い、とり^い 229

第十九章 間奏曲^{いんそうきょく}ふう^いに 242

第二十章 モデルとラ^い、シ^い、ン^い 255

第二十一章 あさきゆめ^いみて^い…… 267

第二十二章 生れ^いか^いわり^い物語 280

第二十三章 殺^いす^い殺^いせ^い殺^いさ^いれる^い、(一) 293

第二十四章 殺^いす^い殺^いせ^い殺^いさ^いれる^い、(二) 306

第二十五章 エピロ^い、オ^い、グ 319

あとがき 333

解説 志沢小夜子 335

編集 小宮山量平

装幀 平野甲賀

装画 長新太

制作 山村光司

発行 鈴木良司

製作担当 金井重雄

下向実

編集担当 日比野茂樹

高林久美子

成澤栄里子

製作 P & P

本文 加藤文明社／よねむら写植

表紙 ダイニツク

カバー トライ印刷

製本 誠製本

用紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本
第24巻

明るい表通りで

第一章 やろがえ

1

―あした、やろがえするんですって。

わたし、犬のピローに教えてやった。

―……？

ピローは、目を^{ほそ}の形にして、わたしを見返した。

―わからない？

―……？

―ほんとは、わたしにもなんのことかよくわからない。やっぱし、とうさんにちゃんと聞いてみるか。ピローがかすかにうなずいたので、わたし、決心した。

―ん。そうする。

それで、その日はいつもみたいに早くから寝てしまわないように、すぐに「お昼寝」することにした。今日は、

幼稚園で少しばかりは、でに駆けまわったせいかな、わたし、すぐにことんと眠ってしまった。ピローは、ちゃんとつきあってくれた。夢の中でも、ピローはわたしの横で眠っていた。ほんとによく眠る犬だこと。でも、夢の中では、わたし、なかなか寝つけなかったから、そんなピローにちよっぴり腹をたてた。つきあいの悪い犬め。だから、ピローのたれ耳をもちあげると、

ーおきろおきろおきろおきろおきろ。

と、早口でどなってやった。

ピローはとびおきた。その驚きっぷりがおかしくて、わたし、笑ってしまった。そして、その自分の笑い声で、わたし、目をさましてしまった。

時計を見ると六時。ずいぶん長い「お昼寝」だったこと。それなのに、ピローはまだ眠っていた。あきれた眠り犬。これじゃ、留守番をしてるわたしのガードマン役がとまらないじゃない。とうさんの期待を裏切ることになるじゃない。わたし、夢の中でと同じように、たれ耳をもちあげて、

ーおきろおきろおきろおきろおきろ。

と、つづけさまに呼んでやった。ピローはとびおきた。夢の中とそっくりのあわてようだったので、わたし、思い出し笑いもふくめて、二重におかしくて、思いきり吹きだしてしまった。

！……！

ピローは鼻の穴を！の形にして拗ね、つんと横をむいてしまった。笑われたことに腹をたてたのだ。

*

前にも同じようなことがあった。とうさんが、絵の仕事がすまなくて、アトリエからでてくると、床みがきに打込んだことがあった。とうさんが、あんまり熱心にみがいたので、ほんとにつるつるになった。わたし、用

心してゆっくり歩いた。そうとは知らないピローは、いつもの調子で忙しく駆けこんできて、みごとにすべり、すてんところがったものだ。

とうさんもわたしも吹きだした。

ピローは、立ちあがろうともしないで、ふてくされ、あぐらをかいたみたいなおかしなかつこうで坐りこみ、白い目でわたしたちをにらんだ。とうさんは、自分のしたことのできなかったことで、すぐに笑ったことをピローにあやまった。それなのに、ピローときたら、まだ拗ねていた。

——……自尊心を傷つけてしもたもんな。

とうさんが言った。

——ジソンシンってなあに？

わたしがきいた。

——ほこり、やろか。

——ほこりなら、掃除機で吸いとればいいでしょ。

——いや、プライドを傷つけたと言うたほうがええのンかな。

とうさんは言い直してくれたけど、わたしにはよけいにわからなくなってしまった。だいたいとうさんは、わたしがまだ月の光幼稚園の年長組の女の子だという気もちがうすいのではないか。いつもまるで大人相手のときみたいな言葉を使う。かあさんなら大人だから、そのままわかるだろうけど、かあさんは体をこわしてさへ帰ってる。あちらの方が空気もいいし水もおいしいし気もちも楽だからって、じいちゃんやばあちゃんのいる高知へ帰ってる。それからもう一カ月もたっているというのに、とうさんはまだ、わたしのふたり暮らしになれてくれないらしい。わたしのことをときどきかあさんとさんかく——いや、さつかく（この言葉もとうさんに教わっ

た)して、大人相手のような話し方をしてくれるのだった。

—わかんない。

ふくれた声で言って、わたし、ちゃんときいておくことにした。きくはいつときの恥——というのも、とうさんに教えてもらった諺だ。

—そうやろな。英語いりやもンな。

とうさんは頭をかいて、わたしの顔を見直した。やっぱりさっきは、かあさんとさつかくしていたのだ。

—かずみの場合で説明したらわかるやろか。

—ば、やい？

—かずみが、同じようなめに会ったときのこととで説明するちゅうことや。

ついでに言うと、かずみというのはわたしの名前。とうさんの名はたかしといって高志と書くの。名前全部だと、冬野かずみと冬野高志ということになる。

自分のことだと言われて、わたし、坐り直した。

—加島さんの言ったことで、お前がピロミたいに拗ねたことがあったやないか……。

またついでに言うと、とうさんったら、東京暮しがもう七年にもなるというのに、大阪弁と関西なまりが抜けない。抜こうとしない。抜きたくないのだ。

わたしはこちらの生れだし、かあさんは、こちらの言葉になれようと努めたから（でないと、幼稚園の父母会のときにしゃべりにくいんですって）ふたりとも、こちらの言葉を使っている。だから、とうさんの言うことが

二重にわからないことがある。大人むぎの難しい言い方に、関西のわからない言い方が重なったとき。それで、ついつい質問攻めになることになるんだけど、とうさんの良いところは、こちらがいくらしつこくきいても、めんどうがらずにいくらでも答えてくれることだ。わたしがわたしなりにわかるところまで、つきあってくれることだ。

——……もう忘れてくれたンかいな。

それなら嬉しいンやけどという表情で、とうさんは言った。それで思いだしてしまった。

——忘れてません。

——そうやろな。えらいおかんむりやったもンな、あのときは……。

忘れるものですか。あれはレディ（これもとうさんに教わった。女の子は三歳のときからレディで、「死ぬまでレディ」やったら、えらいもンや……）ですって）に対するブジョク（これもそのとき教えてもらった言葉）だった。

加島さんはとうさんよりちょうど十歳若い詩人で（わたし、最初、加島さんの仕事のことを聞いたとき、シンニ死人とまちがえたもんで、会うのがとてもこわかった）、すぐ近くに住んでいる。なんでも、とうさんたちがこの町にやってきたら、すぐ近くのアパートに住むようになったらしい。わたしが生れる前のことだ。加島さんのアパートまでは、わたしの足でも歩いて十五分くらいのところだから、加島さんは五分ばかりでうちへやってくるができる。そのせいか、加島さんは朝晩、うちへやってくる。ピローの散歩がかりをかってでたからだというけど、もともとは、朝晩うちへきてごはんを食べるから、そのお礼にということらしい。これもわたしが生れる前からのことだ。

——詩人は食べられヘンさかいなあ。

とうさんが口癖のように言い、かあさんが、

—絵描きさんもかわりませんでしょ。

と言ったと聞いた。そのかあさんが、加島さんに食べにいらっしやいと言ったらしい。それほど——とうさんとくらべて、加島さんは食べるのがたいへんだったらしい。だいたい犬が飼えるだけでも、とうさんの方がゆとりがある。

とにかく、加島さんは若い詩人にしては早おきで、まだ若い絵描きにしては早おきのとうさんがおきたころには、もうちゃんと犬小舎の前に来ていて、すぐにピローをつれて林道へ散歩にでかけてくれる。

—犬には土の道が一番です。

と加島さんは言っていて、うちの裏から林道に入り、山沿いに歩く。そのまま、鉄道の踏切りをこえて、山を一周する。これはけっこう時間がかかるから、加島さんが帰ってくるころには、「低血圧で早おきがむずかしい」（と、かあさんは言っていた）かあさんも、おきて朝食の支度もちゃんとできているわけだ。

そのあと、とうさんは四谷の美術カンケイの本をつくっている出版社へでかけていく。「嘱託」の仕事だそうで、それもわたし、最初に聞いたとき、食卓とまちがってどこかで大工さんの仕事を手伝っているのかと思ってしまった。嘱託だから、ふつうの編集者みたいに、きまった時間に出なくてもよいのだと、かあさんが教えてくれた。加島さんは隣の町の私立中学校へ、週に四日、国語を教えにいつているそうだから、

—まあ、とうさんの嘱託の仕事と同じようなもンや。

らしいけど、収入の方は、加島さんの方がうんと少ないらしい。

だから加島さんは、夕方になるとうちへやってきてまたピローの散歩につきあってくれる。雨の日はピローの相手をしてくれる。

そんな毎日がつづいていたらしい。加島さんは、とうさんの絵が好きなので、いつか自分が文を書き、とうさんが絵をつけた本をつくって出版したかったらしい。でも、そんなわりのいい仕事が若いふたりにくるわけがない。

そのうち、わたしが生れたものだから、加島さんととうさんは、わたしのためにそうした本を一冊だけつくってくれたらしい。らしいというのは、かあさんが、その本をとても好きで大事にしているので、わたしにまだ見せてくれないからだ。

―世界にたった一冊きりの絵本だもん。

と、かあさんはその本のことを言うときはいつも、女の子みたいな顔になり、女の子みたいな言い方になった。それでわたしも、まだむりを言ったことがない。かあさんから見せてくれる日まで待つていることにしたのだ。とうさんも、

―それは、かあさんがぼくの絵のことを好きで大事に考えているということやさかい……。

と、にこにこしているものだから、よけいに見せてとは言いだせなくなってしまったのだ、わたし。

といったような加島さんが、やがて、ピローといっしょに、わたしのめんどろもみることがあった。というのも、かあさんの体がそんなにかんじょうでなくて、わたしの世話がしきれないときもでてきたからで、とうさんが帰るより早くうちへこられる日、わたしのおしめかえなどもしてくれたということらしい。もちろん、わたし、おぼえているわけがない。何も知らなかった。

それを知ったのは、加島さんの詩を初めて聞いたときだった。

その日、とうさんも加島さんも少しばかり酔っていた。というのは、ふたりとも交替でわたしにビールをのむようにすすめたから、わかったのだ。どちらも酔うと、そうする癖があり、わたし、三つのときからビールのあわなら少しはいただけるようになっていた。

その日は暑くって、のどがかわいていたんだ、わたし。だから、ほんの一口のんでしまった。そんなわたしを見て、加島さんが手を打ち、うれしいから自作の詩を聞かせマスと言った。

へあの白いかがよくような

小さな裸身が

私に出発のときを教えてくれた……

というくり返しがある「詩」だった。わたし、まず、ラシンという言葉がわからなくて、

—ラシンで、なあに？

と、きいたんだった。

加島さんはとうさんと顔を見あわせ、

—すっぽんぽんの体のこと。

と、説明してくれた。

—ふうん、スッポンのこと……。

わたし、よけいにわからなくなってつぶやいた。